

町史

とっておきの話

208

洋画家

渡部 等

只見警女夜話

只見での警女

差別されることも多かつた警女ですが、越後の地主のなかには丁重に扱った例が多々あります。「われわれがこうして幸せに暮らせるのは、この世の因業を一手に引き受けて背負ってくれている警女さんたちのお陰だ。けっして粗末にはなんねえ」という大旦那もいたようです。こうした心情がながく越後の地に警女を残すことにもつながったのでしよう。

今回、只見町内で警女を知る何人かの方々に貴重なお話を聞くことができましたのでご紹介いたします。

○叶津・長谷部孝一さん

(昭和四年生まれ)の記憶
昭和十八年まで八十里越を越えて警女が来ていた。当初は五人で来ていたが、やがて三人になった。以前は、叶津には三瓶光義さん宅(先代・佐一郎氏)と長谷部正一郎さん宅(先代・

亘氏)の二軒の木賃宿があつて、そこが警女宿になつていた。越後から手間取りに来ていて番所に泊まつていた男衆の何人かが同郷で気安いだらうということ、八十里越の大三本沢まで迎えに行つていた。その川を渡るのは危ないということ、オンプして来た。身なりはごく簡単な七分

なかつた。来ていたのは二人組の警女で、棒のようなものを一緒につかんで歩いてきた。バアが越後の下田から来た人で、そういう縁で警女の世話をしていたのだろう。子どもには面白そう、歩く後尻をついて回つた記憶がある。

○只見・新国本子さん

(大正十一年生まれ)の記憶
小学校三、四年生の十歳くらい、雪解けから十月の半ばくらいの間で、来ると一軒一軒門付けして歩き、夜は警女宿で近所の衆を集めて唄と三味線を聴かせていた。テレビもラジオもない時代だったから、娯楽と

つたように記憶している。このように三人ほどにお尋ねしただけでも、只見町での警女の記憶は意外と残つていました。新国本子さんは実際に警女唄の文句まですらすらと口ずさんでくださいました。「もう一回聴いてみたいなー」という彼女の表情の奥に警女への郷愁感が色濃く漂つて見え、同じ越後出身で警女の面影を追つている私としてはとてもうれしく感じられました。

いったらそんなものくらいだった。○八木沢・五十嵐恵子さん
(昭和四年生まれ)の記憶
実家(故五十嵐豊樹氏宅)が警女宿で、よく泊まつていたよ

うだ。蚊帳まで背負つてきていて、翌朝、それを見えない手で端をきっちり揃えてたたむ様子は子供心にも驚いた記憶がある。行儀も身なりもきちつとしていて、正座してもめつたに足をくずさ

いまでも覚えてる。悲しい内容だった。謝礼は、お米なら小皿一杯ほど、お金なら五銭か十銭だった。五十嵐辰男さん宅も警女宿だったみたいだ。警女は年に二回ほど来ていた

よう、組も二つほどあ



警女(渡部等・絵)